

熱演

舞台上では、新進気鋭の若手演者から、変幻自在のアドリブで盛り上げを図るベテラン演者までが、洗練された演技で会場を沸かせた。

第10回公演に出演した演者は、当時と同じ配役で出演するなど、工夫が凝らされた舞台。前回公演を見た観客は昔を懐かしみながら楽しみ、前回は知らない観

客も、演者らの熱演に魅了された。

主役で軍医役の藤尾蕉雪さん（23）しょうせつ Ⅱ南昌Ⅱは「とても充実した舞台だった。人の死についてリアルティを出すため、研究して本番に臨んだ。手応えを感じている。町民劇場、手作り舞台の素晴らしさを感じられた」と公演を振り返り、主役を演じ切った達成感をにじませた。

同じく主役でピリカ役の

鈴木春花さん（不来方高1年）Ⅱ南矢幅6区Ⅱは「開幕までは緊張していたが、幕が開いた後は舞台と一体化できた。ピリカ役は訛りがあったので、発音に気を付けた。稽古は大変だったが、物語の中には現代にも通じる部分があり、演じることができて良かった」。稽古に苦勞しながらも、現代にも通じる町の歴史を表した舞台に、関われた喜びを語った。



1



2



4



3



5

北の大地は知っている 徳丹の城に礎あり――

平成18年の公演は、町民劇場第10回の節目を記念し、町民劇場の立ち上げ当初からの念願だった、徳丹城跡を舞台とした物語を展開した。今回の第24回公演では、せりふや演出などをアレンジし、今の町にふさわしい形に改良。史実に基づく物語ではないが、公演で描かれた人々の関わり、出来事は決して、歴史から掛け離れたものではないだろう。

舞台を創り上げた演者、裏方らの熱意は、公演を通してこの土地に息づく、誇るべき歴史に改めて気付かせてくれた。



6



7



8

写真・物語解説

1. 徳丹城内の何者かに馬を盗まれたとして、近隣の族長らが徳丹城内に侵入。それを取り囲む、城の兵士ら。
2. 病気の妹・アヌシを城内へ運び込んだピリカと母親（右手前）。軍医が治療するも、軍を信用していない父親（左奥）が城へ乗り込み、力づくで治療を止めに入ろうとする。
3. ピリカが住む西屋村での火災のシーンで、炎をイメージしたダンスを披露する子どもら。
4. 火災でのけがが悪化し、軍医の治療も空しく亡くなってしまふ、ピリカの祖母。
5. 争いの無意味さを説く、城の副将
6. いつまでも軍を信用しようとしなない、ピリカの父親を投げ飛ばす母親（右から3人目）
7. 兵士から稲作を学び、ようやく、心を開くピリカの父親（右）
8. 公演のクライマックス。徳丹城と町への誇りについて呼び掛ける演者ら

物語

今から約1200年前。陸奥の国、最北・最大の規模で築造された志波城がたびたび水害に遭うため、徳丹の地に移築された。ある日、見張り中の兵士たちに、田んぼ仕事から戻った鎮兵たちが不満を募らせ、けんかをする。副将がいさめるが、兵士や鎮兵たちは、徳丹城にいる意味や古里を思い悩んでいた。そこへ城近くの西屋村の娘・ピリカが病気の妹を助けてほしいと、母親と共に軍医にお願ひし、治療をしてもらう。しかし、ピ

リカの父親は、城にいるものは全て敵視し信用しない。

ある晩、西屋村は盗賊に放火される。兵士たちや軍医は救援に向かい、多くの村人たちを助ける。その後、西屋村では城の役人や僧侶が村人たちに拝礼の仕方や仏教を広め、鎮兵たちが田の開拓の指導をする。

兵士たちと村人の交流が進むにつれ、お互いの気持ちが変わっていく。そして、徳丹城の役目を終えるときが来る。

脚本／木石耕太郎
脚色・演出／佐々木絵梨子